

在外教育施設での教育についての一考察

～ シンガポール共和国での心の居場所を求める教育の必要性 ～

2013-2016 年度シンガポール日本人学校シニア派遣 石川 友一

はじめに

この国は確かに北半球に位置している。あまりに赤道に近いので秋分の日近くになると、人の影が見えなくなり、児童の遊びの一つである影踏みは選択肢に入らなくなってしまう。太陽がほぼ真上に来てしまうからだ。緑は豊かで、蒸し暑さは一年中続き、切れ間はない。一年間の朝5時の平均気温は我が家の温度計で27度、一生住み続ければ、一生サウナ風呂の中に暮らしているようなものだろう。実に過酷な自然環境である。木々は青々として、成長も早いような気がする。常緑樹がほとんどで、落葉の時期は木々によって微妙に異なる。葉を落とし始めるとみるみるうちに落ち葉が街路をおおい、清掃係の方々が、落ち葉掃きに追われている姿を見ることができる。そして、たちまちの内に新緑が強烈な太陽の光を照り返し始め、2、3日もすると青い周りの景色に溶け込んでしまう。街路樹は3年に一度くらいのサイクルで切られるようだが、すでに大人の胴体ぐらいの太さになっている。

【開発以前から立っているネムノキが、街路樹として利用されている】

針葉樹は富裕な家庭の庭に象徴的にそそり立っている。竹も珍しい。これも庭木だと見なされている。だから、日本人学校で七夕行事をするときは大変である。保護者が、知り合いの庭からいただいてくると言うのが定石だが、その保護者の児童が卒業してしまうと、係の先生は、4月から落ち着かない日々を送らなければならなくなってしまう。特にシンガポール日本人学校のクレメンティ校の3年生は、七夕行事をメインにして地元の学校と交流をしているからだ。ちなみに、シンガポール日本人学校には小学部がもう一校あり、チャンギ校と呼んでいる。短冊に将来の夢を書いて、お互いにそれを発表する。地元の学校の児童は英語で書いている。クレメンティ校の交流する小学校の児童は、中国系の児童が多いが、インド系やマレー系の子もかなりいる。彼等は、それぞれの生活様式や言語、行事をもっていて、日本人にとっては、多人種、多文



【4年生の交流の様子】

化、多言語の中で暮らしていることになる。日本人学校の児童は、日本語で書いている。発表の時は、英語である。事前の準備の時にしっかり英語の先生に発表の仕方を教えていただいているのだ。日本の子ども達は、シンガポールの国語（マレー語）ではなく、公用語（マレー語、中国語、タミル語、英語）の中で一番使われている英語を活用して暮らしている。

このような過酷な自然と多人種多文化の中で生活するクレメンティ校の児童の特徴といえば、学習準備の手際の良さ、英語の優れた能力、反面、おしゃべり（特に月曜日は激しく、月曜病と呼ぼう）、希薄な人間関係であろう。また、保護者については授業内容の詳細な説明を求めたり、授業方法に対する意見を言ったりする一方で、校外授業などでは積極的に協力する。これらの特徴が、教員に児童の実態把握に混乱をもたらし、学級経営に苦汁をなめさせる現実直面させる要因になっている。

そこで、これらの課題を解決するために、課題となる実態が生まれた原因として仮説を3つ立てた。【仮説1】児童の生活実態は、寝るまで計画的に緻密な生活設計がされているのではないかと。【仮説2】彼等の生活は、保護者の子どもに対する夢の実現化によるものであろう。【仮説3】彼等は保護者に絶対の信頼を寄せ、保護者の子どもへの夢の中で、シンガポールで必死に育っている。このような仮説をもって、保護者と児童との関係をからませ、彼等自身の生活をとおして考察してみたい。そのために、私が赴任した2013年度から2016年度までに小3から小6までを対象に行なったもののうち、6年生に行なったアンケートの結果と保護者と話したことや児童の生活の実態を通して考察して、どのように解決すれば良いかを論じてみたい。この課題の解決は、きっと他の日本人学校においても参考になると思う。

1 「学び舎」の選択

児童の多くは、駐在員の子弟である。約10年後には帰国しなければならない。ちなみに、最近の駐在期間は以前のような3年間ではなく、10年が多いそうだ。だから、20代の若い保護者が多い。「先生方は3年間ですか。それでは、こちらの国のことなど分かりにくいでしょう。」と言われる。派遣教員は、それが第1の目標ではないので、その点は問題にならない。勿論そういう父親達は、休みの日にはほとんど家に居ない。東南アジアから西アジアまでをテリトリーとして活動をしているので、出張で何日間も家を空けることになる。また、日本から会社の上司達がやってくるので、その接待を優先させなくてはならない。それで、児童の中には「先生、お父さんは土・日、家に居なかったのよ。日本からお客さんが来てゴルフに朝から出かけたの。でも、分かってるわ。お父さんは自分が、ゴルフが



【シンガポール日本人学校クレメンティ校】

したいのよ。だから、接待はゴルフにしているのよ。今日はインドに出張よ。帰って来るのは週末だって言ってたわ。」また、保護者の中には、シンガポールに住居を移して、飲食店や建設業などの会社を起こして活躍されている方も多し。生活の基盤がどの国にあるかで、自分の子どもに与えたい教育の内容は当然変わってくる。また、両親の国籍の違いによっても学びの場所や学校に在籍する期間が変わってくる。

例えば、父親がイギリスの出身であれば、小学校5年の7月まで日本人学校で学ばせ、9月からはインターナショナルスクールに通わせる。幼い頃は、母親の母語である日本語の初歩を学ばせ、祖父母との会話ができるようにすることと小学校程度の日本語会話ができるようにしておけば、将来役に立つこともあるであろうという利を考えての選択である。しかし、子どもがもらってくる成績表には関心が高い。「パパに、昨日、叱られちゃった。今日の夕方からパパの仕事でバンコクに行くの。私も行くんだ。でも、教科書も持って行くんだよ。最低。」と、言って終業式の終わった学校を後にしていった1年生がいた。勿論父親と話すときは英語である。また、両親が日本人であっても、最初は日本人学校に通わせているが、途中からインターナショナルスクールへ転校していく子どももいる。両親が、自分の現状と自分の子どもの将来を思い描いての選択だろう。また、シンガポールの現地の小学校に入れる保護者も多い。インターナショナルスクールより学費が安く、授業も英語で教えているので、英語の習得には安価で近道だろう。このような児童は日本語を忘れてしまいやすいので、シンガポール日本語補習授業校に土曜日に通わせている。小学1年生から中学3年生までが学んでいる。このコースを選択する保護者は多く、400人ぐらいの児童生徒が学んでいる。彼等は、教室では一切英語を使わないという約束があると言っていた。教室から出て手洗い場などで休憩しているときは英語で話している。こちらの方が、日本語で話すより話しやすいと言っていた。先生方は、大変だろうと想像に難くない。先生はシンガポール日本人会が一般募集して採用している。家庭の主婦が多い。日本語以外の教科について、日本に帰ったとき困るだろうと考えられるかもしれないが、そこは母親が奮起し、日本の教科書がシンガポール日本大使館を通して配布されているので、それを使って母親が教えているのである。また、日本人向けの塾も利用している。

このように、自分の子どもがどこの学校で学ぶかは、保護者が派遣されたこの機会に、子弟に英語を習得して欲しいという願望の程度によって、分かれているのである。また、将来日本以外の国で生活するようになる子どもについては、日本語をどの程度まで扱えるようになっていればよいかで、どの時点で日本人学校を離ればよいかを考えているのである。保護者が子どもに、将来どこで、どのように活躍してくれる人になるかの夢を、教育に関わることで叶えようとしていることがよく分かる選択である。

2 子ども達の生活

では、「学び舎」を親の夢で選ばれた子ども達の生活は、どのような状況なのか、日本人学校に在籍する児童に限定して見てみよう。実態調査については、2015年度の7月に行なった6年生を対象にしたアンケート調査を利用する。6年生を取り上げた理由は、進路を考える上において、親にとっても子どもにとっても大切な学年で、子ども達の生活に親の意向も含めた顕著な特徴が現れるだろうと考えたからである。調査は調査日前後七日

間のおおよその生活について記入してもらった。調査を短時間で終わらせるために、あまり深く考えなくてすむよう自分の判断で答えてもらった。しかし、生活の概要は明確に現れている。

1) 学校生活の実態

さて、シンガポール日本人学校クレメンティ校の6年生の学校生活について校内の生活を見てみると、各教科学習への熱心な取り組みだけでなく、入学式や運動会などの学校行事を始め児童会、委員会、クラブ活動といった特別活動でのたんたんとした活動、そして活動を取りまとめる委員長や副委員長といった役割も受け持ち、学校の児童活動の牽引役をも十分に果たしている。

6年生は、テストの点数にとっても敏感で、学期末になると自分の成績のことを聞きに来る児童も多くいる。向学心旺盛で、授業の中でも教科書に記載されていない内容も扱ってくれるように頼んできたり、中学受験が必要な児童は応用的な課題を扱ってくれるように要求してきたりする。



【児童朝会で環境問題について英語で発表する6年生】

児童の下校の様子を見ると、校内に並んでいる20台ばかりの行く先の異なるバスの中から、自分のコンドミニアム（マンション）へ行くバスを選んで乗り込む。

学校の教材だけでなく塾やスポーツクラブでの必要な道具類も手に提げたり、背負ったりして居る児童は、校門を出て、塾のお迎えバスや保護者運転やお抱え運転手の自家用車に乗って目的の場所へ向かう。

2) 一般的一週間の生活時間について

ウィークデイ（月曜日から金曜日）の生活については、帰宅後、宿題をし、時間があればコンドミニアム内で遊ぶことができる児童が半分いる。しかし、友達と遊ぶことができる子どもは全体のわずか16パーセントに過ぎない。コンドミニアムに日本の子どもがいない場合や、同学年の子どもがいない場合は遊ぶことができないし、下学年の子どもと遊ぶには抵抗を覚える年頃でもある。だから、ウィークデイに遊ぶ半分の子は、一人遊びが多いと考えて良いであろう。宿題が終わっ



【林立するコンドミニアム】

た部屋で、ゲーム遊びに興じる児童の姿が浮かんでくる。勉強は大体午後10時までには終えている。土・日の過ごし方は、宿題が金曜日に終わっていない児童は、それをすませたり、その後は家族と買い物に行ったり、テーマパークなどに行って、家族とともに過ごしているようである。月曜日から金曜日までは、学校生活が充実するように、そして、土曜日と日曜日は家族との団らんという1週間の生活パターンが形成されている。

このように保護者の知的な子育ての中で、児童は毎日を規則正しく送っているようである。しかし、注意しなければならないのは、児童同士の会話時間が限られていることである。下校方法もほとんどの児童がバス下校で、車内では会話は厳禁で、他学年の世話をし、お手本となるよう求められている。バス内の世話はアンティとしてシンガポールの方がしているので、彼等のルールに従う事になってしまっている。彼等にとって日本語は、カラスのわめき声にしか聞こえないのかもしれない。

このように、6年生同士の情報交換や自分の気持ちを聞いてもらう信頼作りの時間はきわめて少ないことがわかる。

3) 特異な生活時間を送る子ども達

クレメンティ校6年生には、次のようなさらに特異な生活時間を送っている児童のケースもあるのである。

① 学習塾に行く

塾を利用している割合は、英語塾も含めると97パーセントである。

中でも、学習塾を利用している子どもは55パーセントであるが、行き方には2つのケースがある。一つは学校から塾に直行するケースである。もう一つは、帰宅後通塾するケースである。塾へは学校から直接行く子が32パーセント、帰宅後行く子が18パーセントで、直接行く児童の方が多い。彼らは、登校時、学校の教材と塾の教材の両方を重そうに抱えて各学級に入っていく。そして下校時には、再び両方の教材を抱えて、校門外の塾バスが待っている場所へ行きバスに乗り込む。同じ塾の児童が全員乗り込むと出発する。もちろん、他の学年の児童と同席である。6年生以外の児童も学習塾を利用している。

塾での学習が終わると、塾のバスが各コンドミニアムに送ってくれ、その後は家庭での生活が展開することになる。

これらの通塾する児童は、一家団欒の時間を多く取ることができない。なぜなら、まだ学校の宿題ができていない。塾の宿題も出るので、これもやらなければならない。また、学校の授業をさらに補強する通信講座の問題にも取り組まなければならない児童がいる。そうすると就寝は10時、または、取り組む家庭学習の数によっては、12時、午前1時30分にも及ぶことにもなることがわかる。

土・日に、学習塾を利用している児童もいる。彼らは、ウィークデイを利用している児童よりも、時間的に余裕があるだろうが、学校の休日に学習塾に行くことで、長期にわたる計画的な既成学習体制に組み込まれていることになる。

このように、ウィークデイには、一人遊びが中心で、また、土・日も家族とともに行動することが多くて、同級生と話をする時間は休憩時間の数分間でしかない。彼らの情報交換や気持ちのやり取りの機会はきわめて少ないことがわかる。こうして希薄な人間関係が醸成される。

② 英語塾に行く

英語塾に通っている児童は45パーセントとその割合は高い。シンガポールという国が英語を公用語し、海外に駐在しているのだから、この際英語は身に付けてさせておきたいという保護者の願いが相乗効果としてあるのだろう。また、学校での週3時間の英語の学習と習熟度別学級編成が保護者の入塾への意識をさらに強化していると考えられる。学校では年に2回英語学習の参観日を実施している。習熟度の高いクラスへの我が子の入級を願うのは保護者の自然の要求だろう。

6年生ぐらいになると、英語能力の差は歴然としてくる。シンガポールに来て、まだ日の浅い家庭の児童ほど英語塾や家庭教師について勉強している。

また、家庭での学習の中でも英語を勉強している児童が、40パーセントもいる。これは、学校からの宿題もあるが英語の検定試験に向けて取り組んでいる児童が多いからである。親子ともども英語の検定試験への意識が高い。英語検定は年2回実施されている。年齢の異なるたくさんの児童が検定試験に挑んでいる。勿論、現地の学校やインターナショナルスクールで学んでいる児童や生徒もやってくる。試験官が言っていたが、日本人学校の児童の欠点は、「質問されて、分からないと、ぐずぐずして何も言わないことだ。」これは、日本人の特徴かもしれない。「このような時、受験者は別の切り口で、話を続けていくという方法もある。会話を切らないこと。」と言うことだ。こうした英語学習が英語能力を上げている。

③ 宿題以外の家庭学習

児童の学習手段は、宿題や塾だけにとどまらず、学校の学習をさらに補強増進させるために通信講座に取り組んでいることが多い。通信講座は日本から取り寄せ、問題に答えて日本へ送り返し、添削をしてもらって送り返してもらうシステムである。41パーセントの児童が活用している。また、問題集も30パーセントの児童が活用している。このような勉強方法について児童に聞いてみると、多くの保護者が小学生の頃とっていたようだ。自分の勉強方法を我が子にもさせていると言うことだろう。こうして、日本と同じように基礎基本と応用力を怠りなく身につけようとしているのである。ここには保護者の自分のキャリアへの誇りと我が子にも同じようなレベルで成長して欲しいという願いが読み取れる。

④ スポーツクラブに行く。

スポーツクラブを利用している6年生は88パーセントである。学習塾の利

用割合と比べてみると、やや低いですが、保護者は文武両道に取り組む子ども像を理想としていることが読み取れる。

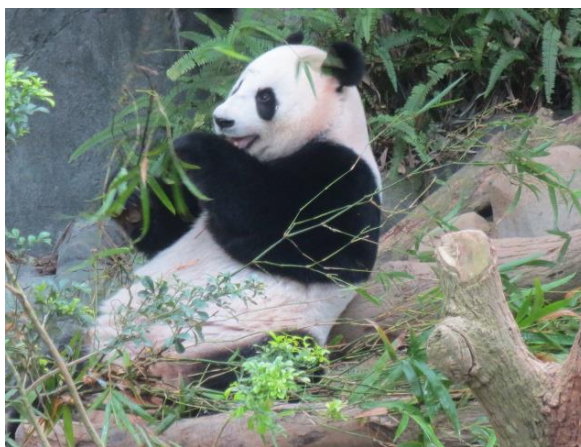
さて、学習塾での児童の生活状況の実態は、スポーツクラブに所属している児童についても同様である。ただ、習う内容が違うだけである。ちなみにスポーツクラブにウィークデイに行っている児童は33パーセントである。

スポーツクラブには、学校から直行するケースといったん帰宅したのちスポーツクラブに行くという2通りである。これは学習塾と同じである。30パーセントの児童が週に1回か2回スポーツクラブに行っている。サッカークラブに所属する児童が多いが、土・日にはソフトボールや野球、剣道などに取り組んでいる児童もいる。ウィークデイは午後3時半頃からだいたい午後5時頃まで練習に励んでいる。それから、保護者が迎えに来て帰宅する。その後、宿題を始めることになる。クレメンティ校の宿題の量もかなり多いので、宿題を済ませて外に出て遊ぶことは不可能である。夕食を食べ、一家団欒の時間もそこに、問題集や英語、通信講座に取り組み、それを終えて眠ることになる。彼らにも、スポーツを通しての会話はあるが、自分の悩みなどを話す時間はとても取るような時間はない。

こうしたスポーツクラブは日本人会が後援していて、春や秋にはサッカー大会やソフトボール大会、バレーボール大会が開催される。これには、小学生、中学生、高校生（シンガポールには早稲田大の附属高校がある。東南アジアにある日本人学校中学部からの受験者もいるので、ずいぶん難関らしい。合格すれば、寮があるので、保護者も安心できるようだ。保護者が帰国や他の国に派遣先が変わっても、子どもは寮でシンガポールでの学校生活を楽しまらしい。）、事業所（日本人学校も勿論参加）、同好会も出場する。また、文化系のクラブにも地元の行事に参加したり、発表会を開いたりして大いに意欲を高めている。珍しいものでは、バトントワラーや一輪車のクラブもある。

3 土・日は家族とともに

児童の1日の家庭生活は学校生活を核にして、それに塾やスポーツクラブが寄り添う形で構成されている事がわかる。土・日には、自分の家で過ごす児童が多い。それは、家族とともに買い物に行ったり、動物園や食事に行ったりするからだろう。保護者も子どもと一緒に家族とともに過ごす時間を大切に確保しようとしていると考えられる。



【シンガポール動物園のパンダ：シンガポールでも人気者】

しかし、クレメンティの保護者は土・日のどちらかには家族とともに過ごす時間をとることで家族意識の醸成をカバーしているが、友達同士の心の交流という側面からは、カバーし切れていない。

スポーツクラブ等の習い事の種類は多く、24種類ぐらいある。日本人会や特技を持つ親たちの同好会が児童向けの習い事をそろえていて、児童の多彩な能力を発揮させる機会がつけられている。習い事には、保護者が送り迎えをしている。午前中が練習なら、帰りにはシンガポール料理が楽しめるレストランか、日本人会のレストランで食事をする。ちなみに日本人会のレス



【家族同士の会食風景】

上待たなければならない。ただし、日本人会だから日本語が使えると思っでは恥をかくことになる。従業員の多くはシンガポールの方々である。

また、土・日に家庭で手伝いをしている児童もいるので、家庭教育にも力を入れられている家庭もあることがわかる。

終わりに

月曜日の登校時の終わりのないおしゃべり、人間関係の希薄さ、反面、学習の準備を手早くやる、英語能力高さ、といった課題を、このような実態から解明していくと、クレメンティ校6年生の児童の中には、学校での授業終了後から眠るまでに、次々とプログラムをこなさなければならない状況がつけられていることがわかった。こうした児童を合計すると84パーセントにも達するが、他のピアノやそろばんを習っている児童も含めて考えると100パーセントに近く



【神々の彫像で飾られたヒンズー教寺院：国内に多数点在する】

なるであろう。彼らは、毎週、塾やスポーツクラブに通い、外部での学習を充実させている。また、家庭内では宿題や通信講座、問題集などに取り組み、しっかり睡眠を取ることができない日も出現する。塾でもスポーツクラブでも隣に子どもがいるのであるが、それは、スポーツの競技上の話しとなり、また、学習上の自分の考えを話し合うことにつきる。このような生活から、彼らは登

校してくると友達どうしでよくしゃべり、時には授業中も私語が付きないことにもなってしまう。当然のように、一日の生活を手際よくこなさなくては、到底クリアできない。そして、友達との人間関係も一時的な関係しか育たない。友達同士で悩みや趣味の話などはとてもできる時間はない。それで、人間関係は希薄となり、学習の準備を手際よくやってしまう習慣が身に付くこととなったと考えられる。また、1年間に半数近くの児童が転出し、半数近くが編入してくることも関係している。

彼らは、教科学習だけでなくスポーツにも力を入れている。これは、保護者の子ども像が反映していると考えられる。子どもは、親の愛をしっかりと享受して、文武両道に励み、健やかに成長して欲しいという。だから、土・日は子ども達のために家族で一家団欒の時間を過ごすという家庭が多い。児童はこの親が夢見る理想像の中で生活しているのである。土・日も家庭内での生活を余儀なくされている。ちなみに、対象の6年生が4年生の時行なったアンケートでは、悩みの相談は母親にするが一番多かった。

英語も学校での1年生からの週3時間の授業、それから外国語活動を1年生から4年生は年間10時間（現地校との交流）、5・6年生は週1時間（交流や英語レポートの制作）、その上家庭での家庭教師によるレッスン、英会話塾通い、買い物に出れば英語でのやりとりと英語のシャワーの中で生活しているので、自ずと英語力が向上する。それを確認するかのような英語検定の受験。それを励みにさらに、学習に取り組む。保護者の願いが学校のカリキュラムに反映されて、その上さらに向上するための家庭教師や塾通いもさせている。英語の力は年々アップする。

このように、保護者の学校教育への関心の高さは、保護者が自分の置かれた派遣先を子ども達に有意義に生かして育てたいという意志を十分に理解することができる。子ども達に英語だけでなく、多様な文化や過酷な自然についても学び、心豊かな子に育てて欲しいと願っているのである。



【シンガポールのメイン銀行街を遠望】

したがって、シンガポール日本人学校としては、保護者の希望と児童の幸せな学校生活について次の2点に取り組まなければならない。

児童が直接訴えないので、保護者と学校が容赦のない生活をさせていたのでは、学校生活か家庭生活でかならずその歪みが現れる。それが、最小限に食い止められるように、学校としても児童同士の会話の時間を計画的に作ってやらなければならないだろうし、「学級便り」などを活用して、児童の実態を基本とした教育のあり方を保護者に働きかけていかなければならないだろう。また、

児童同士の接触の機会が少ないだけ、児童同士のトラブルの解消法について未熟であることが課題として残る。児童の適切な学習時間と生活時間のバランスの理解が必要である。

次に、赴任する教師は、シンガポール共和国の社会、歴史、自然をしっかりと把握し、それを授業の中で取り上げ、児童がシンガポールで学んだと言う認識をしっかりと持つように教育しなければならない。こうした授業が組み立てられる教師が、児童にとって良い教師であり保護者にとってありがたい教師なのである。先に「学び舎の選択」で述べた「先生方は3年間ですか。それでは、こちらの国のことなど分からないでしょう。」と、言われる。派遣教員は、それが第1の目標ではないので、その点は問題にならない。」は、全くの嘘である。一般人が10年かかるところを派遣教員は、数ヶ月で理解しなければならないのだ。派遣教員に高い能力が求められるゆえんである。

以上、シンガポール日本人学校クレメンティ校に赴任して考えたことを簡単にまとめてみた。これから赴任される先生方に参考にしてもらいたい。そして海外における児童の生活はどのようにあればよいかという課題に本気に取り組んで欲しい。